

生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成(2年次)

～音楽を介して自他と関わり、「つながり」を考えて学ぶ生徒を育成する方略の研究～

工藤 美奈子, 平澤 香織

Minako KUDO, Kaori HIRASAWA

概要

1年次研究では、副題を「学びを生かし、主体的に音楽と関わる生徒を育成する方略の研究」とし、「逆向き設計」論の手法を取り入れた授業実践を行った。学習の中核部分に「本質的な問い」を据え、パフォーマンス課題に取り組みさせた。その結果、異なる曲や題材、領域や分野との関連を考え、様々な角度から音楽の特徴を捉えたり、捉えた事柄に広がりや深まりが生まれたことを生徒自身が実感したりできるようになった。また、中学校までに音楽科を学習する意義について生徒自身が明確に考えられるようになったことで、単に「現在の自分自身が楽しいから」学んでいる段階から「将来の自分や他者にとって現在の学びが有効に働く」と生徒自身が実感できる段階に引き上げることができた。2年次研究では、「逆向き設計」論に基づいた学習活動を継続させるとともに、生徒自身が過去から現在に至る自らの学びの「つながり」を見だし、自己の学びを調整させながら将来の自己へ「つながり」をもたらすための方策について研究を進める。

キーワード：「逆向き設計」論、本質的な問い、永続的理解、パフォーマンス課題、他者との協働、メタ認知

1. はじめに～研究の目的

学習指導要領(2017年7月)の総則編には、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である『見方・考え方』は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとし、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。」と示されている。

また、学習指導要領解説で、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と示されたことにより、生徒が教科としての音楽を学ぶ意味が一層明確になった。さらに、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することは、生徒がその後の人生において、音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながる」とも記されていることから、生徒自身が学ぶ意味を考えることで学びの質を高めるとともに、学校での学びを終えた後も主体的に音楽と関わり、豊かな人生を送ることのできる生徒を育成することが重要だと考えている。

2. 生徒の実態(1年次研究の成果と課題)

本校音楽科の1年次では、音楽科の学習と生活との結び付きや、学習したことが生活や社会で役立つことを生徒に実感させられるようにするための方策を考え、授業実践を行った。その際に効果的に働いたのが「逆向

き設計」論に基づく実践であった。具体的には、表現領域(歌唱・器楽)、鑑賞領域における「本質的な問い」を「(題材で取り上げた)音楽の魅力と、その音楽が長く親しまれている理由を追究すること」とし、両領域において一貫して取り組ませた。その結果、「音楽そのものがもっている魅力」を追究する中で、様々な角度から曲の特徴を捉えたり、捉えた事柄に広がりや深まりが生まれたことを生徒自身が実感したりできるようになった。そして、異なる曲や題材、領域や分野との関連を考えながら学習し、生徒自身が音楽科を学習する意味を明確にすることができるようになった。それには次の4点が挙げられた。

- ①生涯にわたって音楽と関わるきっかけをつくること。
- ②音楽によって心や生活を豊かにすること。
- ③長い歴史を経て受け継がれてきたものを次の世代に受け継ぐ必要があること。
- ④自国や他国の文化を知ること。

こうしたことから、単に「現在の自分のために」学ぶことに留まらず、「将来の自分や他者にとっても現在の学びが有効に働く」ことを生徒が実感していることが分かった。

しかしながら、以下のような課題もある。

- ・創作分野と他の分野や領域との「つながり」
- ・歌唱分野における「理解」や「思考」と「技能」のレベルの
かい離

以上のことから、これまで以上に題材や分野、領域間のつながりを意識した題材配列や題材構成を行うとともに、「知識」と「技能」のバランスやそれらの習得方法を考えた授業実践の在り方が肝要であると考えられる。

2. 1. 目指す生徒像

本校音楽科では、以上の課題や求めを踏まえ、2年次研究の目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・自己や自己の学びと音楽との「つながり」を見だし、学びを広げたり深めたりすることのできる生徒
- ・過去の学びと現在の学びの「つながり」を実感しながら、将来の自己との「つながり」を考えて学ぶことのできる生徒

3. 研究主題及び副題

学習指導要領に「伝統」や「文化」という文言が度々出てくる。これは、時代を超えて人々に受け継がれてきた音楽を、これから先の未来にも残し、継承していくことが現代の子供たちに求められているということである。

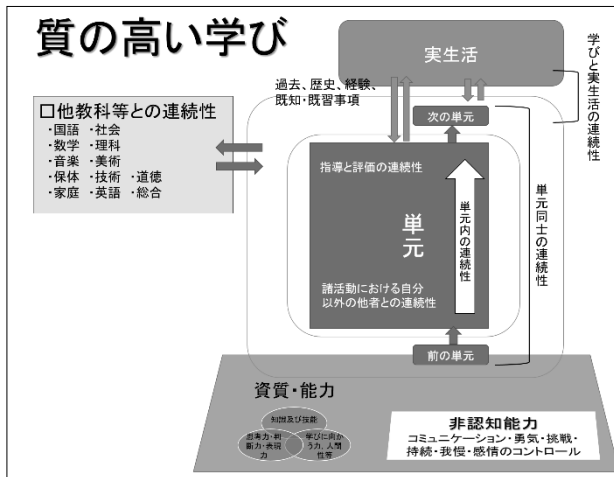
以上のことから、本校音楽科の2年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

- 生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成(2年次)
- ～音楽を介して自他と関わり、「つながり」を考えて学ぶ生徒を育成する方略の研究～

4. 研究の内容と方法

本校の2年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、様々な側面から「連続性」というものを考えることが重要であると捉えている。

本校研究の構造図は以下である。



本校2年次研究の構造図

この中で、本校音楽科では、特に「自己と他者、生活、社会との関係性」及び「題材や領域、分野との連続性や関連性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。



本校音楽科2年次研究の構造図

4. 1. 学習の連続性や関連性、系統性をもたらす題材配列や題材構成の工夫

音楽科には表現(歌唱、器楽、創作)と鑑賞の2つの領域があり、同一の領域や分野においては、学習の関連性を生徒自身が感じながら学習に取り組むことは比較的容易である。しかしながら、領域や分野の異なる場合においては、過去の学習との関係性を感じにくい。たとえば、既存の音楽を「演奏する」歌唱や器楽の表現領域と「鑑賞する」鑑賞領域では、生徒が行う活動は大きく異なる。表現領域は「自ら音を発する」ことに対し、鑑賞領域では「他者の奏でた音を聴く」ため、後者はややもすれば受け身になりがちである。しかしながら、鑑賞領域で曲の特徴を捉えたり、奏法や音色などの演奏の仕方について理解したりしたことを自身が表現する際に生かすことは可能であり、豊かな音楽表現を行うためには必要不可欠である。そこで、教師が題材や教材として取り上げる曲の特徴や魅力を十分に理解し、それらを意識しながら意図的・計画的に題材配列や題材構成を行うことは、学習効果を高める上で有用であると考えられる。

4. 2. 「永続的理解」へと至る「本質的な問い」とパフォーマンス課題の設定

西岡加名恵(2016)は、『「本質的な問い」を問うことで、個々の知識やスキルが関連づけられ総合されて『永続的理解』へと至ることができる。』と述べている。また、小山英恵は、『領域の『本質的な問い』は、単元レベルの『本質的な問い』を包括するものであり、あらゆる単元の根底にある問いである*1。』と述べている。

学習指導要領解説には、「知識」の習得に関する指導について、「音楽を形づくっている要素などの働きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるようにすること、(中略)『知識』は学習の過程において生徒個々の感じ方や考え方等に応じ、既習の知識と新たに習得した知識等とが結び付くことによって再構築されていくものである」と記されている。

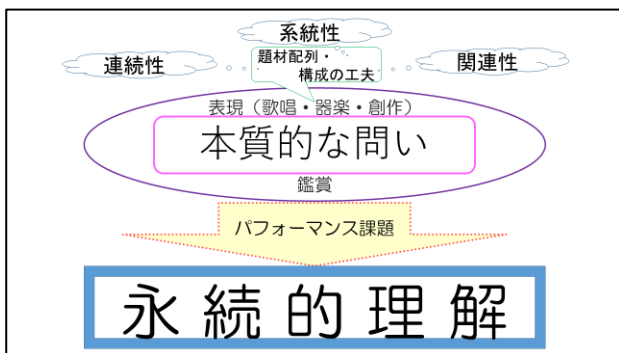
つまり、音楽科の学習において、単に音楽記号の読み方や意味が「知識」ではなく、それらを「理解」した上

で「表現できる、思考できる」状態まで引き上げた状態が「知識を習得した状態」と考える。

西岡は、「パフォーマンス課題は、学んだ知識やスキルを応用して実践したり表現したりすることを求めるような、複雑で総合的な課題である。」と述べている。また、小山は、「音楽科において、パフォーマンス課題は、単に演奏する、創作するといったパフォーマンスを求めるのではなく、さまざまな知識や技能を子どもが自らの生と関わらせながら総合的に活用するという創造的な営みのパフォーマンスとして現れる『永続的理解』を、すべての子どもたちにもたらすためのしかけとして捉えることができる。」と述べている。

音楽科は、学年を追って学習内容を積み上げていくというよりも、表現と鑑賞の多様な学習活動を繰り返していくことにより、学びの対象を広げたり、学びの質を高めたりするという特徴のある教科である。こうした教科の特性を鑑みたとき、教科や題材の中核となる「本質的な問い」を繰り返し問うことが「永続的理解」へとつながり、ひいては、学校での学びを終えた後にもそれを生かして音楽と関わっていくことができると考える。さらに、様々な題材や領域において繰り返し問うことによって、題材や領域の関連性に気付かせる、という点においても効果的に働くものと考えられる。こうしたことから、「逆向き設計」論が効果的に働く手法であると考えられる。

そこで、4. 1. の手立てを用いて意図的・計画的に題材配列や題材構成を行った授業実践の中で、既習の様々な知識や技術を活用しながら4. 2. の「パフォーマンス課題」に取り組むことで、知識や技能を習得させたり、向上させたりするとともに、先述したとおり「永続的理解」へともたらすことができると考える。



本校音楽科における2つの手立ての構造図

5. 実践と考察

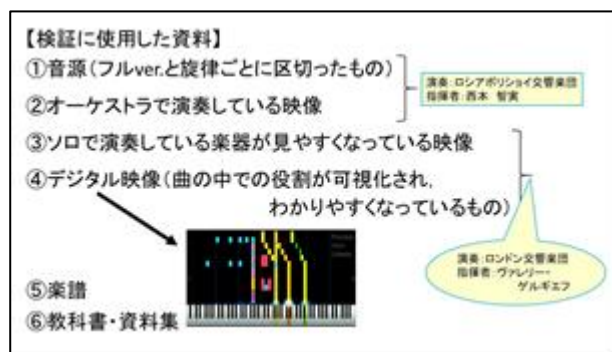
実践A. 「曲の構成や音色を味わいながら鑑賞しよう (第2学年) <B鑑賞 ア(ア), イ(ア)>
 実践B. 「調の効果を生かして (第3学年)

<A(3) 創作 ア, イ(ア), ウ [共通事項] 旋律, 調>

5. 1. 実践Aにおける題材の構想

本題材における実践を行うにあたり、第2学年の生徒は鑑賞の学習に対して、次のような意識があることが分かった。66.6%の生徒は、新たな音楽に出会うことで自分の感性を広げることができる鑑賞の学習を楽しんでいる。一方で、72.9%の生徒が自分の感じ取ったことや曲の魅力について根拠を明確にしながらかかりやすくまとめることに難しさを感じている。これまでの学習でも、音楽を形づくっている要素をもとに音楽的な特徴を捉え、曲の雰囲気と結び付けながら魅力を考えることは行ってきた。その中で、様々な視点から音楽的な特徴を捉える力は高まってきたが、自分の感じ取ったことを端的にまとめたり、根拠を明確にしながらかかりやすく他者に説明したりすることが苦手な一面も垣間見えてきた。そこで、今回は自分の感じ取ったことや考えの根拠をより明確にし、それらを仲間に発表する学習活動を展開していくことが効果的であると考えた。そこで、音源や動画などを組み込んだスライドを作成させた。音源や動画があることで、自分の考えをより分かりやすく相手に伝えることができるとともに、発表を聞いている側も視覚と聴覚を同時に働かせながら理解を深めることができると考えた。

本題材では、大まかな曲の特徴を把握した上で、「本質的な問い」(後述)に対する予想を自ら立て、それらを検証していく学習活動を展開した。具体的には、様々な資料を用いて曲を検証していくことで、自分が納得するまで音楽と向き合いながら課題を追究していく。提示する資料については、以下のとおりである。



これらの資料の①～⑤を google chrome の共有ドライブ上にアップし、全生徒が自由に見られるようにし、自分の課題を解決するためにどの資料を用いればよいのかを思考・判断し、それらを必要に応じて何度も見たり聴いたりしながら追究していくことで、楽曲に対する理解がより深まるのではないかと考えた。このように、ICT 機器を用いながら課題を解決するために自らどのような方向性で学習を進めていくのかを考え実行し、そして互いの意見を交流することで自分自身の考えを深めていくという「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることで、根拠を明確にしながらかかりやすく魅力を捉え、伝える力を高めていけると考えた。

なお、本題材の指導では、以下の3点の工夫を試みた。

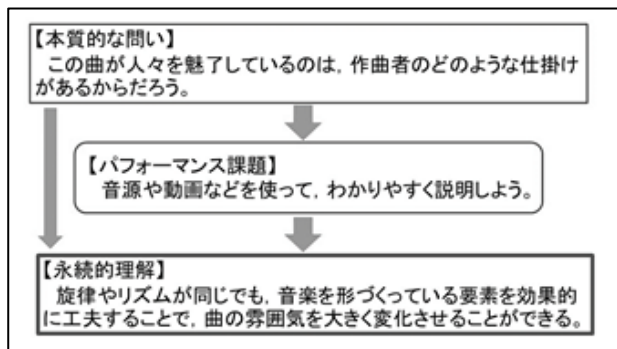
①鑑賞と創作の関連を図る題材配列や題材構成の工夫

②「永続的理解」へと至る「本質的な問い」とパフォーマンス課題の設定

③ICT 機器の活用

本題材では、旋律やリズムを繰り返して構成されている楽曲でも、音楽を形づくっている要素を効果的に工夫することで、曲の雰囲気大きく変化させられることに気付かせる。教材である「ボレロ」は、2種類の旋律とスネアドラムを中心に奏でられるリズムが繰り返される中で、音色や強弱などが変化していく構成になっており、音楽を形づくっている要素が曲に与える効果を感じ取りやすい作品である。生徒は事前にリズム創作の学習を行っており、「旋律に重ねるリズムが違うと楽曲の雰囲気が変わる」ことを学んでいる。ベートーヴェン作曲「交響曲第5番ハ短調作品 67」の学習では、オーケストラの豊かな響きを味わう中で、様々な楽器の音色についての理解を深めた。このように、これまで学んだことを用いたり発展させたりしながら、本題材での学習に取り組んでいけるように工夫した。さらに、次の題材では、旋律創作に取り組んでいく。「ボレロ」と同じ「ハ長調」で4小節の旋律を創作し、その旋律を2回繰り返す。2回目には楽器の音色や音の重なり方などの音楽を形づくっている要素を工夫して楽曲を完成させ、異なる分野における学習との関連を図る。

なお、本題材は、「逆向き設計」論の考え方を取り入れて構成した。「永続的理解」へと至る「本質的な問い」とパフォーマンス課題は以下である。



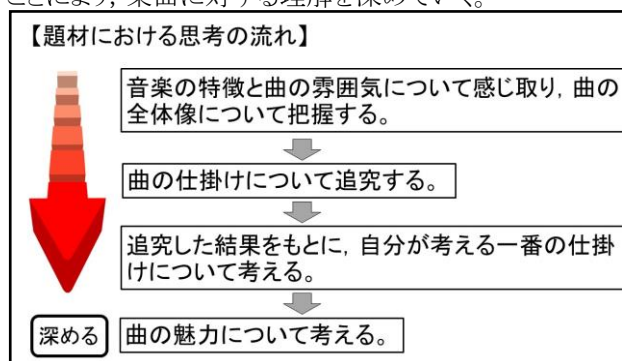
この課題を解決していく中で重要となってくるのは、音楽を形づくっている要素の変化の有無が楽曲にどのような影響を与えているのかを生徒一人一人がしっかりと感じ取ることができるかどうかである。そのためには、自分自身が納得いくまで音楽と向き合い、新たな気付きを重ねていくことで理解を深めていく必要がある。また、自分の考えは曲のどこの部分を根拠としているのかを明確に示すことで、より説得力が増し、楽曲に対する理解も深まると考えた。以上の学習を効果的に進めるため

に、本題材では ICT 機器を用いて、学習活動を展開していくこととした。

なお、本題材の指導計画は以下である。

時	学習内容	評価規準
1	○「ボレロ」を音源のみで聴き、音楽の特徴と曲の雰囲気について感じ取る。【工夫②】	知
2 ・ 3	○「本質的な問い」に対する自分の予想を考える。 ○資料を用いながら、個人で曲について調べる。 ○調べた結果をワークシートにまとめる。【工夫②】	思
4	○調べた結果をもとに、作曲者の一番の仕掛けだと思ふ部分を考える。 ○作曲者の仕掛けた一番の工夫について、スライドにまとめる。【工夫②】	思・ 態
5 (本時)	○作曲者の仕掛けた一番の工夫についてスライドを用いて発表し、グループで交流する。 ○作曲者の仕掛けた工夫点について全体で交流し、まとめる。 ○この曲の魅力について考える。 ○題材全体を振り返り、自らの学びの変容や今後の学習との関連、実生活との関連について考える。【工夫①・②】	思・ 態

本題材では、生徒の思考を以下のような流れにすることにより、楽曲に対する理解を深めていく。



本題材では、最初に全体で「ボレロ」を鑑賞し、音楽の特徴と曲の雰囲気について感じ取り、曲の全体像について大まかに把握する。この段階では、特徴として挙げられた音楽を形づくっている要素が、どのような変化を遂げていくのか、曲の中でどのような効果をもたらしているのかなどについて、生徒は詳しい部分まで理解できていない。また、生徒が「もっと深く追究していきたい」と感じている音楽を形づくっている要素も一人一人異なるため、全体で楽曲について追究するよりも、個人での検証活動を取り入れて学習を展開していく方が、一つ一つの要素について深く掘り下げて追究していけると考え、個人での学習形態とした。その中で、「全体から細部へ」と少しずつ焦点をしばりながら追究させていくことで、楽曲全体に与えている効果について、より深く理解できると考えた。その後、グループや全体で交流し、仲

間の意見から自分が気付かなかった新たな視点を知ることで、さらに思考を広げることができると考えた。その上で曲の魅力について考えると、より説得力のある分かりやすいものになると考え、このような学習の手立てをとった。

5. 2. 実践AIにおける授業の実際

本題材は音楽を形づくっている要素をもとにしながら曲の仕掛けについて追究し、曲の魅力について考えていくという流れで授業を展開していくこととした。

1時間目では、曲を音源のみで鑑賞し、音楽の特徴と曲の雰囲気について自分が感じ取ったことをまとめた。以下は生徒が記述した実際のワークシートである。

音楽の特徴	楽器が少しい	違う音色	少し強くなった
	管楽器が少い? → 楽器が変なも	→ 楽器が変なも	また違う音色
曲の雰囲気	一定のリズム	繰り返す	低い音も
	長調 (小太鼓)	一定	繰り返す
曲の雰囲気	弱い (フルト、トロンボーン、バースト、鉄琴?)	一定	一定
	繰り返す (21拍子)	バーストに加勢	繰り返す
曲の雰囲気	音の	弾む	
	ささやか	のびた	
曲の雰囲気	弱々しい		
	心細い		
曲の雰囲気	緩い		
	もろい		
曲の雰囲気	心地良い		

この生徒は、一定のリズムや旋律が繰り返されていること、曲が進むにつれて楽器の音色が変化していることを聴き取った。このように音楽を形づくっている要素をもとに、音楽の特徴を多くの生徒が聴き取り、楽曲の大まかな特徴について全員が把握することができた。また、「楽曲のどの部分でどのような楽器が使われているのか」など疑問に思っていることがあり、その内容が次時からの課題につながっていくものとなった。

2・3時間目では、楽曲の大まかな特徴を振り返った後、「本質的な問い」を提示し、その問いに対する自分の予想を考え、資料を用いながら個人での検証活動に入った。以下は生徒が記述したワークシートである。

【本質的な問い】
「この曲が人々を魅了しているのは、作曲者のどのような仕掛けがあるからだろう。」

様々な楽器を使っていたから、同じメロディーでも聴き方が変わるから。

「本質的な問い」に対する予想

楽器の変化

1. 小太鼓のリズム
2. 1 + フルト
3. 1 + クラリネット
4. 1 + ファゴット
5. 1 + ヴァリネット
6. 1 + オボエ
7. 1 + フルト、トロンボーン
8. 1 + サクソフォーン
9. 1 + サクソフォーン
10. 1 + ホルン、バスクラリネット
11. 木管、クラリネット
12. トロンボーン
13. 木管楽器
14. B + ヴァリネット
15. B + ヴァリネット
16. B + トロンボーン + ヴァリネット
17. B + 強奏器 + トロンボーン
18. フルト、トロンボーン、ヴァリネット
19. フルト、トロンボーン、ヴァリネット
20. フルト、トロンボーン、ヴァリネット
21. コーダ ... 転調する元を調用し続ける

作曲家 ラヴェル (1875-1947)
作曲技術の精巧さと民族的なリズム
機知の富み流麗な音階の活用

曲の聴き取り方
速度 ... 全体のスピード、
強弱 ... 強弱の差が小さい、全体的に
初めは ... 階級楽器の重なりが
→ 後半には ... 21拍子に強弱が

検証活動で調べたこと・わかったこと

この生徒は、「本質的な問い」に対する予想を楽器の変化と考えた。1時間目に聴き取った音楽の特徴と曲の雰囲気を結び付けながら予想を考え、検証活動を行った。検証活動では、オーケストラの演奏映像やデジタル映像を主に使い、聴き取ったことを楽譜と照らし合わせながら、本質的な問いに迫っていた。また、音色が変化していくことにより、テクスチャや強弱など他の音楽を形づくっている要素も変化していき、曲の雰囲気が華やかになっていくことにも気付くことができた。どの生徒も自分が立てた予想をもとに曲の仕掛けについて追究し、その中で疑問に思ったことをさらに調べていくなど、主体的に取り組む姿が見られ、曲の特徴について深く捉えていた。

4時間目では、初めに前時までに調べたことをもとに自分が考える一番の仕掛けだと思う部分について考えた。様々な視点から捉えた仕掛けの中で、どの部分が多くの人々を魅了することにつながっているのかを考えることで、生徒たちは曲の特徴とそれらもたらす効果について深く考えることができた。以下は生徒が記述したワークシートである。

【仕掛け】
多くの楽器と巧みに使い分けて、2つの旋律と演奏されていること

【選んだ理由】
同じ旋律が繰り返されているが、音色が違ってくるから
様々な楽器の中で最もオーケストラで使われることが多いので、意外性や面白さを感じたから

この生徒は、旋律を演奏している楽器の変化に着目しているが、ただ移り変わっているということだけではなく、順番や組み合わせ方にも工夫があると考えたことから「巧みに使い分けて」という表現をしている。また、選んだ理由についても、「オーケストラでは普段あまり使われていない楽器（サクソフォーン）を使っている、意外性がありおもしろい」と

いうように、これまでの学習内容と比較しながら考え、今回の検証活動で新たに学んだことを生かし、曲の魅力につながることを取捨選択して記述していた。他のワークシートの記述を見ると、楽器の音色や強弱など曲の進行とともに変化していくものに注目している生徒が多数いたが、一方でスネアドラムのリズムや旋律の繰り返しなど変化しないものに注目している生徒もいるなど、様々な考えが出されていた。

その後、パフォーマンス課題を提示し、スライドの作成方法について説明するとともに、以前学習したベートーヴェン作曲「交響曲第5番ハ短調 作品67」を使い、スライドを用いた発表例を教師が示した。「主題の雰囲気の違い」を自分が考える一番の仕掛けとして結論付け、音源や楽譜を組み込んだスライドを用いて説明した。一度学習した内容ではあるが、生徒は視覚と聴覚を同時に働かせながら発表者の考えの根拠を理解して聞き、考えに納得している様子が見られた。スライドや発表のイメージをもった後、自分が考える一番の仕掛けをスライドにまとめる取組を行った。

スライドの内容と実際に作成したスライドの一部を以下に示す。

【スライドの内容】

- ①「本質的な問い」に対する自分の予想
- ②調べた中で分かったこと・気付いたこと
- ③自分が考える一番の仕掛け
- ④その理由



この生徒は、動画と楽器の画像を用いて、旋律を演奏している楽器が変わることでのどのような雰囲気の違いが生まれるのかを比較している。約15分間の曲の中で、どの部分を抜き出して比較すると自分の考えの根拠をより明確に示すことができ、説得力のあるものになるのかを試行錯誤し、作成する姿が見られた。ICT 機器を用いたことで、スライドを作成

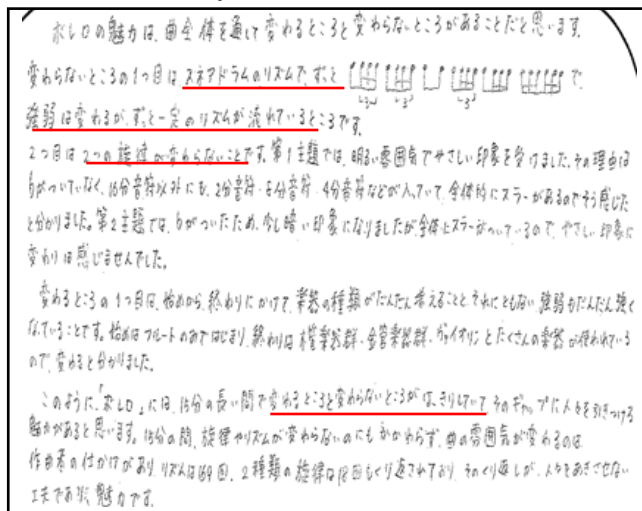
している中でも何度も音楽に触れ、曲の細部まで耳を澄ませながら特徴を捉えたり確認したりすることができていた。

最後の5時間目には、3～4人のグループで交流を行い、スライドを用いながら自分が考える一番の仕掛けについて発表した。発表者は音源や動画、楽譜などを提示しながら発表することで、より根拠を明確にして自分の考えを伝えることができ、聞いている側は、言葉だけではなく視覚や聴覚も働かせながら発表を聞くことで、発表者の考えをより深く理解するとともに、自分の考えと他者の考えを比較することで、思考を深めることができた。



スライドに自分の考えをまとめ発表するということは、その考えに至った理由や根拠を理解した上で要点をしっかりとおさえ、自分の言葉で分かりやすく説明する必要がある。そのため、検証活動を行った上でスライドを作成したことにより、音楽を形づくっている要素がどのような効果を曲にもたらしているのかを細かいところまで知ることができ、それらが生かされることで、以前よりも根拠を明確にし、分かりやすい言葉で自分の考えを発表できるようになった。

その後、どのような仕掛けがあったのかを全体交流し、思考の幅を広げ、最後にそれらを生かして曲の魅力についてまとめた。以下は生徒が記述したワークシートである。



この生徒は、自分が考える一番の仕掛けを「スネアドラムのリズムの繰り返しと2つの旋律の繰り返し」と考えた。自らの検証活動で2つの旋律にはりの有無があり、明るい雰囲気と少し暗い雰囲気になっているという違いにも気付くことができた。それらとグループ交流や全体交流で学んだ音色や強弱の要素も含めて楽曲全体の特徴を捉え、曲の雰囲気と結び付けながら曲の魅力についてまとめている。

最後に題材全体を通しての振り返りを行った。

(1) 今回の学習をする前と後では、自分自身の中で何が1番変わりましたか。

「音楽に対する主体性」が変化した。これまで、先生の指示に従って、音色の特徴を探していたが、今回は自分で資料集のときに本当に演奏指導者が変わるのかなどの疑問を追求していくことができた。

(2) 今回の学習を通して学んだことは、どのようなことですか。

「ずっと同じリズム、旋律も、音色、強弱を変えれば飽きない曲になる」というように、音楽はあることを系統させて、他のことを変えれば魅力的な曲になること。また、それによって変化が強調されること。

(3) 今回の学習を通して学んだことを、今後の音楽にどう生かしていけそうですか。

こちらの授業でも、音楽に自分なりの疑問を持ち、それを追っていた。また、創作の活動では、音色の要素のうち何を換え、何を変えないかをしっかりと決めた。その過程では、曲の全体的な変化も捉えていきたい。

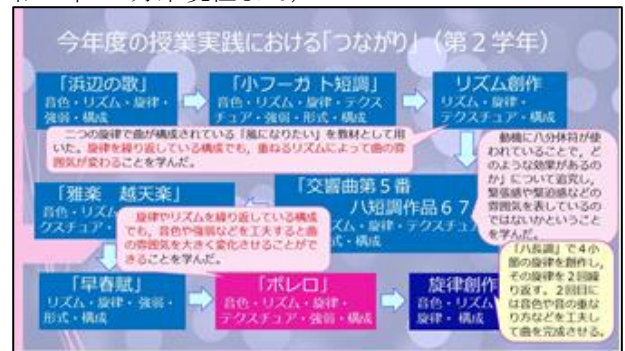
この生徒は、「何度も曲を聴いたり楽譜を見たりすることで、楽曲の特徴を粘り強く細部まで追究し、曲の魅力を考えることができるようになった」と自分の変容を自覚している。また、今回学んだ内容を鑑賞だけではなく、創作の取組にも生かしていきたいという意欲を述べている。

2年生全体としては、「本題材での変容と今後に生かしていくこと」について以下のように考えている。

本題材での変容	<ul style="list-style-type: none"> 1つの情報だけではなく、複数の資料を使いながら比較することで、より根拠を明確にしていけることができた。 既習曲と比較し相違点を見つけていくことで、曲の魅力を考えることができた。 調べていく中で新たな疑問が生まれ、それをさらに調べるなど、意欲的に取り組めるようになった。
今後生かすこと	<ul style="list-style-type: none"> 「音楽を形づくっている要素の中で変化しないものがあったとしても、その他の要素を変化させることで曲の雰囲気に違いが生まれる」と学んだので、創作の学習で生かし、魅力的な曲を作っていきたい。 楽器の音色を変化させることで、やさしさや力強さなど様々な雰囲気が伝わるということが分かったので、今後の鑑賞でも音色と雰囲気の関係性について着目していきたい。

鑑賞だけではなく、創作など他の領域や分野の学習にも、今回学んだ、音楽を形づくっている要素を変化させることと変化させないことのそれぞれの効果や関わりについて生かしていこうとしていることが分かる。また、普段の生活の中でも、その視点をもちながら音楽と主体的に関わっていこうとする態度も見られた。次題材の創作では、今回学んだことを、実感を伴いながら学べるような実践をしていきたい。

なお、本題材までの学習の流れを以下に示す。(令和3年12月末現在まで)



5. 3. 実践Bにおける題材の構想

本題材における実践を行うにあたり実施したアンケートから、第3学年の生徒の79.6%は、創作の学習が難しいと考えていることが分かった。また、その理由には、主に次の3点を挙げている。

- ①音高やリズム、速度、強弱、拍子、調など、考えなければならぬことが多い。
- ②表したいイメージを「音」や「音楽」で表せない。
- ③思いついた「音」や「音楽」を楽譜に表せない。

しかしながら、既習事項から本題材に生かそうなどとしては、以下のように考えていることが分かった。

内 容	割合(%)
速度や強弱などの記号の意味や働き、記譜の方法	58.2
調や転調	48.0
コードや音の重なり	16.3
リズムや拍子	16.3
音色	7.1

※複数回答あり。

※その他として、アーティキュレーションや曲の特徴を捉えることなどの回答あり。

こうした状況から、音高やリズム等、考えなければならぬことがたくさんあったり、イメージを「音」や「音楽」に、さらには楽譜に表すことに難しさを感じたりしてはいるものの、創作に活用できる既習事項はたくさんあると考えていることが見て取れる。また、98.0%の生徒は、他の曲や題材、領域や分野との関連を考えながら学習して

いと回答している。加えて、本題材の直前に学習した題材(歌唱「帰れソレントへ」)で取り上げた調や転調、2年生時の創作で用いたコードを生かすことができると考えている割合が高かったことから、それらを生かした学習活動が展開できると考えた。

本題材では、自分の思いや意図を明確にもち、それらを生かして旋律を創作する活動を中核に据えている。この活動では、写真から得たイメージや印象を一旦言葉で表した後、それを実現させるために用いる調をはじめとする「音楽を形づくっている要素」について考え、旋律の創作をさせる。

また、「写真展で流す BGM をつくる」という場面設定を行うことで、単に「(旋律をつくる)学習のための活動」としてとどまるのではなく、よりリアルな文脈で、「学びと実生活とのつながり」をもたらすことができると考えた。なお、本題材の指導では、以下の5点の工夫を試みた。

- ①既存の曲の教材化
- ②作品交流の場の設定
- ③変容を見取ることのできるワークシートの工夫
- ④生徒の思いや考えを生かした授業展開
- ⑤教師による範奏や参考作品の提示

「表現」と「鑑賞」の学習は、表裏一体である。既存の音楽を「(演奏で)表現」するのと「鑑賞」するのは、相反するように見える。しかし、「鑑賞」によって音楽の特徴を捉えることは、「表現」をする上で不可欠であるとともに、「表現」者としての視点で「鑑賞」することは、音楽について深く理解する上で効果的である。創作は、歌唱や器楽と同じ表現領域の学習であるが、学習の初期段階で教材となる楽曲が存在しない点については、他の2つの分野と大きく異なる。そうしたこともあり、単に音を並べることに終始してしまう可能性もある。

そこで、既存の曲にはどのような特徴があるのか、どのようにつくられているのかを理解させた上で、旋律創作に取り組みさせることで、単なる「音の羅列」から「音楽」へと高められるのではないかと考えた。また、作品を交流することで、自分の作品が「音楽」としてどのように評価されるのか、他者の作品が「音楽」としてどのような価値があるのかを客観的に捉え、それらを自己の作品に取り入れることで、作品の質が向上したり、学びに広がりや深まりがもたらされたりするのではないかと考えた。

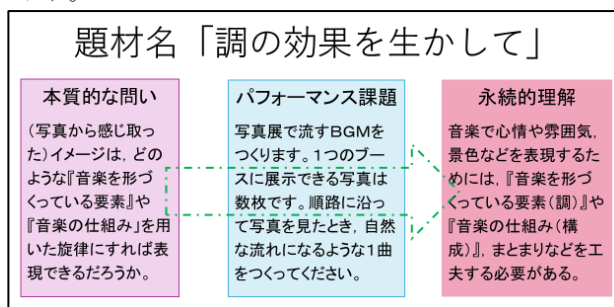
先に本題材に関わるアンケート結果を示したが、題材の学習が進むにつれて、生徒の実態も刻々と変化していくため、生徒の変容を見取ることのできるワークシートや毎時間の学習の記録、授業中の発言等から生徒の思いや考えを注意深く拾い上げ、授業に反映させた。その際、特に、個々が抱えている問題点について取り上げ、全体の場で解決の方法を追究したり、教師が提示した参考作品を修正する「試しの活動」を組み入れた

りすることで、作品に質的な向上を図ることを考えた。

なお、本題材の指導計画は以下である。

時	学習内容	評価規準
1	○調の効果について振り返る。 ○既存の曲の調を変化させ、調の変化のさせ方を知る。 ○調を変化させたことによる印象の違いを明らかにし、調や転調の効果について改めて考える。【工夫①】	知
2 3	○調や転調の効果について振り返る。 ・ ○パフォーマンス課題や旋律創作の条件を把握する。 ○写真を選び、使用する順番、旋律創作に生かす調を決める。 ○旋律をつくる。 ○中間交流を行う。【工夫②】	技 ・ 思
4	○まとまりのある旋律にするための方法、転調時のつながりについて考える。 ○コード進行について知る。 ○コード進行を生かして旋律をつくる。【工夫①②】	知 ・ 思
5	○作品を交流する。 ○題材全体を振り返り、自らの学びの変容や以後の学習との関連、活用の仕方について考える。【工夫①②】	技 ・ 態

本題材は、「逆向き設計」論の考え方を取り入れて構成した。本校の1年次研究においても、題材の冒頭で「本質的な問い」を投げかけ、「パフォーマンス課題」に取り組みさせることで、「永続的理解」へと導くことができたためである。本題材における「本質的な問い」と「パフォーマンス課題」「永続的理解」の内容及び関係を以下に示す。



なお、毎時間の学習後には、これまでの研究の成果として継続して行ってきた「学習の記録」に取り組みさせるとともに、次時への見通しについてワークシートに記述させた。そうすることで、個々の生徒が自分の学習状況や問題点を的確に把握し、解決に向けて取り組むことができると考えたためである。

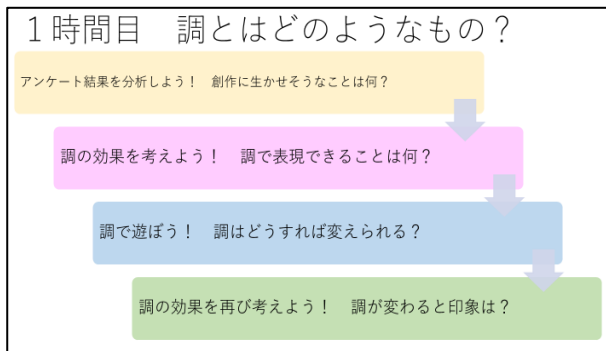
また、創作活動は個人での作業であったが、途中経過を少人数で交流したり、問題点の解決法を全体で検討したりする場面を位置付けた。そうすることで、自己の作品を高めるだけでなく、他者の作品を客観的に見つめ、音楽的な根拠をもって批評する力を高めることがで

きると考えたためである。

ワークシートの記述や交流場面における学びの様子等を含め、授業の細かな実際については以下に述べる。

5. 4. 実践Bにおける授業の実際

本題材は、「5. 3.」で示したアンケート結果を示し、生徒自身が考えていることを取り入れながら創作を進めていくこととした。1時間目の学習の流れは以下のとおりである。



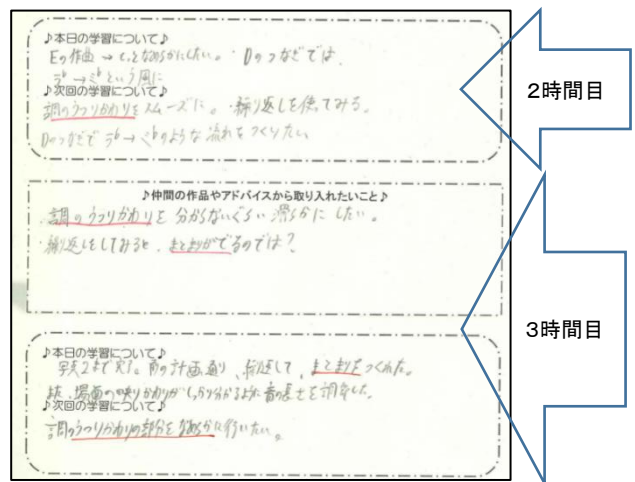
既習の曲から調の効果を考えた後、既存の曲の調を変える活動を行ったことで、調の変え方を理解するだけでなく、調の効果について改めて考えさせることができた。これらの学習は、実際の創作の活動において、調を効果的に用いることへの動機付けになったと考える。

2・3時間目では、調の効果について振り返った後、パフォーマンス課題を提示し、その追究に必要な写真や調の選定を行い、創作活動に入った。次の11種類から2枚以上の写真を選択し、転調を用いた旋律創作を条件とした。



作品がある程度かたちとなったところで、少人数での交流を行った。その際、発表者は、①写真から得たイメージや印象、②イメージや印象を旋律として表すための調や要素について言葉で説明をした後、つくった旋律を演奏した。また、発表を聴く鑑賞者は、①を表現するために②が効果的に作用しているかに焦点を当てて鑑賞し、感じたことや考えたことを発表者に伝えた。この交流を経て、他者からのアドバイスを生かしたり、他者の作品からヒントを得たりし、自らの作品を改善しようとする生徒が出てきた。

先述したとおり、1時間ごとに振り返りを行うとともに、次時への見通しを記述させた。以下は生徒が記述した実際のワークシートである。



この生徒は、2時間目の段階で、調の移り変わりについてもっとなめらかに転調したいと考えていたが、3時間目の中間交流を経て、より一層その思いを強くした。しかしながら、その解決法については見いだせていない。また、中間交流から、旋律にまとまりをもたらすためには、反復を取り入れることが有効ではないか、と考え、その後自分の作品にも取り入れたところ、効果的であることを確かめていた。

次の4時間目では、前時の振り返りに多く記されていた内容(問題点)を全体で交流し、その解決策を考え、参考作品で試した上で、自分の作品を見つめ、完成させることを主な学習活動として展開していくこととした。作品づくりで困っていること及び4時間目の学習の流れは以下のとおりである。

この生徒は、4時間目のところでワークシートを紹介した生徒である。創作に生かすことのできる既習事項がたくさんあることを記述している。

～変容、今後の自分～
 作曲をするときに、この曲は「音を並べて、まとまりがない、なごみがある」
 前の授業の時に「コードの構成音」
 コードの中の音を「かき混ぜる」ことで、まとまりが出てくることを分かった。
 今後、この曲から、作曲をするときは
 ものばりかき混ぜるが、コードの「まとまり」を覚えて、まいたり、
 しいまたりと思ふ

この生徒は、「まとまりがない」と感じていた自らの作品を、コード(の構成音)を視点を盛り込んだことで解決することができた。また、創作に限らず鑑賞においても、コードの視点を生かしていきたいと述べている。

今回の学習での 変容-これからの 自分	今回の創作学習では、自分の「無知と不足」を知ると共に、「楽しさ」と「成長」を感じた。変容は、初めはただ転調して、適当に音をあてた「1」の作品から、音階とコード、そしてコードの順序までも身にして曲を作ることが少なくなって、全体的な曲の「まとまり」を意識できるようになった。これからの自分については、今回の單元でも、と音楽に身を入れてみたいと思った。または、このレポート製作に際して、(とても久しぶりに家のピアノ)を使って、こじんたにもピアノを弾くのが楽しかった。驚いた。だから、義務教育の音楽が経っても、音楽には関係あるし、楽器にも関係ありだ(と思う)と思う。
---------------------------	---

この生徒は、今回の題材での自分の変容を自覚するとともに、義務教育終了後にも主体的に音楽と関わろうとする意欲を述べている。

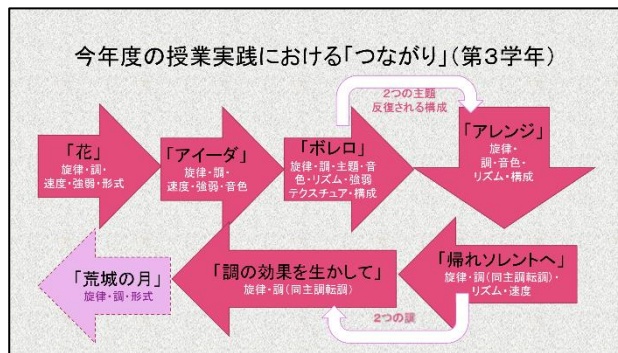
3年生全体としては、「本題材での変容と今後の自分」について以下のように考えている。

本 題 材 で の 変 容	<ul style="list-style-type: none"> ・「音の羅列」から「音楽」に高めることができた。 ・表現したいイメージや印象、心情等を伝える方法(音楽を形づくっている要素の働かせ方)のバリエーションを増やすことができた。 ・音の高さや長さ、強さによってつくられる音楽が、人間に強い印象やイメージを与えることのできるすごさを実感した。
今 後 の 自 分	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の音楽に対して、「どのような要素を働かせることによって、表現したいイメージや印象、心情などを表現しているのか」という視点をもって向き合っていきたい。 ・(本題材までの)3年間の学習によって、身の回りにはたくさんの音楽があり、その音楽にはたくさんの工夫があることを知った。他の音楽についても調べて、知りたい。

創作の題材に限らず、他の領域や分野に生かせる視点が含まれていることが分かる。また、上記以外にも、「(前題材の歌唱「帰れソレントへ」で学習した)転調によって雰囲気が変わることを、創作によって改めて実感した」など既習の知識が実感を伴った理解へと変容したことが記されていた。こう捉えるようになったのは、本題材

に至るまでの様々な学習の過程が複雑かつ密接につながっていたためと考えられる。

なお、本年度における本題材までの学習の流れを以下に示す。(令和3年12月末現在まで)



6. 今年次研究の成果と課題

本校音楽科では、今次研究の主題を「生涯にわたって音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」と掲げて研究をスタートさせることとした。

本稿では、これまで2年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題、及び今後の展望を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校音楽科の2年次研究では、副題を「音楽を介して自他と関わり、『つながり』を考えて学ぶ生徒を育成する方略の研究」とし、過去から現在、そして将来へと至る学びの連続性や関連性を考え、自己調整をしながら学びを進め、深めることのできる生徒の育成を目指した。

そうした考え方のもと、多くの題材を、前年次の研究でも取り組んできた「逆向き設計」論の考え方に即して構成し、授業を展開してきた。

2年次では、1年次の研究を一步進め、題材配列及び題材構成を工夫した。具体的には、一つの題材内において、どのように学習内容を配列するか、一単位時間内において、どのような学習活動を展開するかを工夫することに加え、題材間で同じ領域や分野が続かないようにしつつ、題材で取り上げる「音楽を形づくっている要素」や〔共通事項〕に関連性や連続性、系統性をもたせるよう意図的に配列し、領域や分野の「つながり」をもたらすよう考えた。それによって、生徒が、領域や分野の枠にとどまることなく、広く音楽と関わり、学んだことを活用する姿が見られた。また、生徒自身に「つながり」を予想させたり、振り返らせたりしながら授業を展開することで、過去の学びを振り返ったり、未来の自分と音楽との関わりを見据えて学習したりすることができたのも大きな成果である。

6. 2. 研究の課題と今後の展望

以上の成果があった2年次研究であるが、その一方で

課題もいくつか見られる。例えば、以下である。

①歌唱領域における「理解」や「思考」と「技能」のレベルの乖離

生徒自身が様々な「つながり」を考えながら学習したことによって、「理解」や「思考」に高まりが見られることが多くあった。そして、学習した音楽について様々な角度から「理解」し、「音楽の特徴を生かして〇〇のように表現したい」「音楽の特徴を生かすためには△△のように表現するとよい」などと「思考」に深まりが見られるにつれて、自らの思いや意図を生かして表現するための「技能」が不足していることに気付くことも多くなっていった。「自分の思いや意図を生かすことができるだけの技能を身に付けたい」と願う生徒の思いに応えるためにも、今後も系統的に題材を配列し、構成を工夫することに加え、限られた時数の中で、効率よく技能が向上するよう題材の枠にとどまらず柔軟な指導計画の立案を視野に入れることも必要になるのではないかと考える。

②ICTのより効果的な活用と学習形態

一人一台端末が配備されたこともあり、従来であれば教師主導で一斉に行っていたことを「個」で行えるようになったり、他者と直接的に音や言葉を介して行っていた交流が、端末を用いてより大人数で効率的に行えるようになったりしたことは、ICTの大きな効果である。

今年次は、限られた時数の中で、音楽的な活動を多く取り入れて授業を運用することに重きをおいた結果、従来どおりの紙ベースのワークシートに記述させることが多かった。ICTを用いれば、思考の変容が逐一端末に保存されたり、自他の考えを交流することが容易であったりすることは想定できていた。しかしながら、プレゼンを作成するための時間を生み出すことや、これまでの学習経験を十分に生かした創作を行うためのアプリやソフト等を見付けることは非常に難しく、断念せざるを得なかった。

また、「中学校まで学校で音楽を学ぶのは、自分一人では関わることはないかもしれない多様な音楽に触れたり、仲間と同じ音楽を学ぶことで自分以外の人の考え方に触れたりすることが、音楽に関わるきっかけをつくり、自らの視野を広げ、義務教育を終えた後にも音楽に関わっていくことにつながるのではないかと考えている生徒の考え方は、「個」に応じた学習に対応できるICTの利点ばかりに目を向けることの危うさについて警鐘を鳴らしているようにも見える。

利点と問題点について深く理解した上で、ICTを活用しない場合に比べて、生徒自身が「分かる、できる」などと強く実感できる、効率的に学習活動が進められる、などの学習効果が現れるような活用の仕方を今後模索していく必要性を感じる。そのためには、題材構成や学習形態とも関わらせながら、学習のどのような場面で、ど

のように活用していくのか、さらには、「本当にICTを活用しなければ学習効果を期待することはできないのか」を教師が十分に吟味し、判断することが肝要だと考える。

以上2つの課題は、今日の音楽科教育の重要なポイントになるとも考える。

「音楽を介して集団で学ぶ」学校教育の場で、その意義を考えたときに、どのように「個」を尊び、「集団」として学習を成立させるのか判断に迷うことが多くなっているが、生徒一人一人が、生涯にわたって音楽文化と豊かに関わることのできる資質・能力を育成するためには、教師が「不易と流行」の視点を常にもち、世の中の流れや求めを理解しながらも、音楽科教育の果たすべき役割については決して見失うことなく、効果的な指導が行えるよう工夫していくことが、今後の本校における音楽科の課題になると考える。

注釈

*1 教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか P.87

参考文献・論文

- (1)文部科学省「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(66)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(68)」
- (5)「平成29年版新学習指導要領の展開」明治図書. 2017
- (6)「平成29年改訂中学校教育課程実戦講座音楽」ぎょうせい. 2018
- (7)「中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック」教育芸術者. 2018
- (8)西岡加名恵。「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」. 明治図書. 2008
- (9)西岡加名恵。「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」. 明治図書. 2016
- (10)西岡加名恵/石井英真。「Q&Aでよくわかる!『見方・考え方』を育てるパフォーマンス評価」. 明治図書. 2018
- (11)西岡加名恵/石井英真。「教科の『深い学び』を実現するパフォーマンス評価『見方・考え方』をどう育てるか」. 日本標準. 2019
- (12)奥村好美/西岡加名恵。「『逆向き設計』実践ガイドブック『理解をもたらすカリキュラム設計』を読む・活かす・共有する」. 日本標準. 2020